

社員教育を語る会 (求人教育委員会)

ブラック企業からの脱却

～ 失敗と危機から学んだ人財育成 ～

◆ 報告者：福岡 信一 氏

(株)長浜機設 代表取締役／愛媛同友会 伊予・松前支部

◆ 日 時：2月24日(火) 18:00～20:00

◆ 会 場：一番町ホール

◆ 参加者：27名

「社員教育を語る会」は、2024年の夏に産声を上げた小さな学びの場です。2～3か月に一度、経営の最前線で悩む仲間が集まり、正解のない「人づくり」について本音で語り合ってきました。

今回の報告者は、伊予・松前支部の福岡信一さん。彼が歩んできた道は、決して平坦なものではありませんでした。福岡さんは、2011年の東日本大震災で積み上げたすべてを失い、箱バン一台で福島へ向かったあの日。2013年に創業したものの、待っていたのは「人が定着しない」という過酷な現実でした。10人採用しても5人が去っていく。休みはなく、現場は常に事故と隣り合わせ。いわゆる「ブラック企業」と呼ばれても仕方のない状況だったと、福岡さんは振り返ります。

転職は、あまりにも身近な、自分の子供から放たれた「お父さんの会社では働きたくない」という言葉。経営者として、そして一人の父親として、これほど身を



左から福岡信一さん、司会の堀内章さん

切られる思いはなかったでしょう。その瞬間、福岡さんの心に火が灯りました。「このままではいけない。会社を変える、自分を変えるんだ」と。もちろん、変革は一筋縄ではいきませんでした。改革に反対する仲間が去り、孤独に打ちひしがれる夜もあったそうです。1,000万円を投じた採用活動も、数字上の成果は生まれませんでした。

しかし、福岡さんは諦めませんでした。泥臭く、けれど真っ直ぐに社員一人ひとりと向き合い始めたのです。その種は今、鮮やかな花を咲かせています。現場では、70歳のベテラン職人が若手にITを教わり、代わりに長年培った技術を伝授する。そんな、世代を超えた「技術と心のバトン」が繋がる光景が日常になりました。かつて「デジタルなんて」と背を向けていたベテランが、今ではタブレットを手に「孫にも教えたい」と言います。「建設業でも女性が輝ける」「子供の寝顔を毎日見られるようになった」「10年後の自分を語り合える」…。社員さんたちの言葉の一つ

ひとつが、長浜機設が単なる「職場」から、それぞれの「人生の舞台」へと変わったことを示しています。「地方の建設業と地域社会を守る戦い」。そのことに福岡さんは挑戦を続けます。



含蓄の多い報告でした

かつて自分を拒絶した我が子が、今は「お父さんの会社に入りたい」と言ってくれ、その誇りこそが、地域で輝く会社になっていった。福岡さんから沢山のことを学ばせて貰いました。

参加者の感想

- 福岡さんの実践は、経営者が一番学び続けること、そして社員も学びたいと思う社員を増やしていくこと、社内が共に学び合う仲間になっていった。
- 組織改革は、制度よりも“社長の覚悟”と“継続”が問われると改めて思いました。
- 人が去ることは怖いことですが、理念に共感する人が残り、育つ組織こそ強い。
- 変えられないから変えていくへ踏み出す勇気を与えてくれる学びでした。
- 福岡さんのお話をお聞きしてその後のグループ討論で色々な方々と情報共有出来て良かったです。また自社の現状についてもお話を聞いていただきアドバイスもいただけてとても有意義な時間になりました。

寄稿：堀内 章さん
(Social・Connect / 求人教育委員会)



社員さんも多数参加されました